

革製品のためだけに、
動物の命をいただくことはありません。

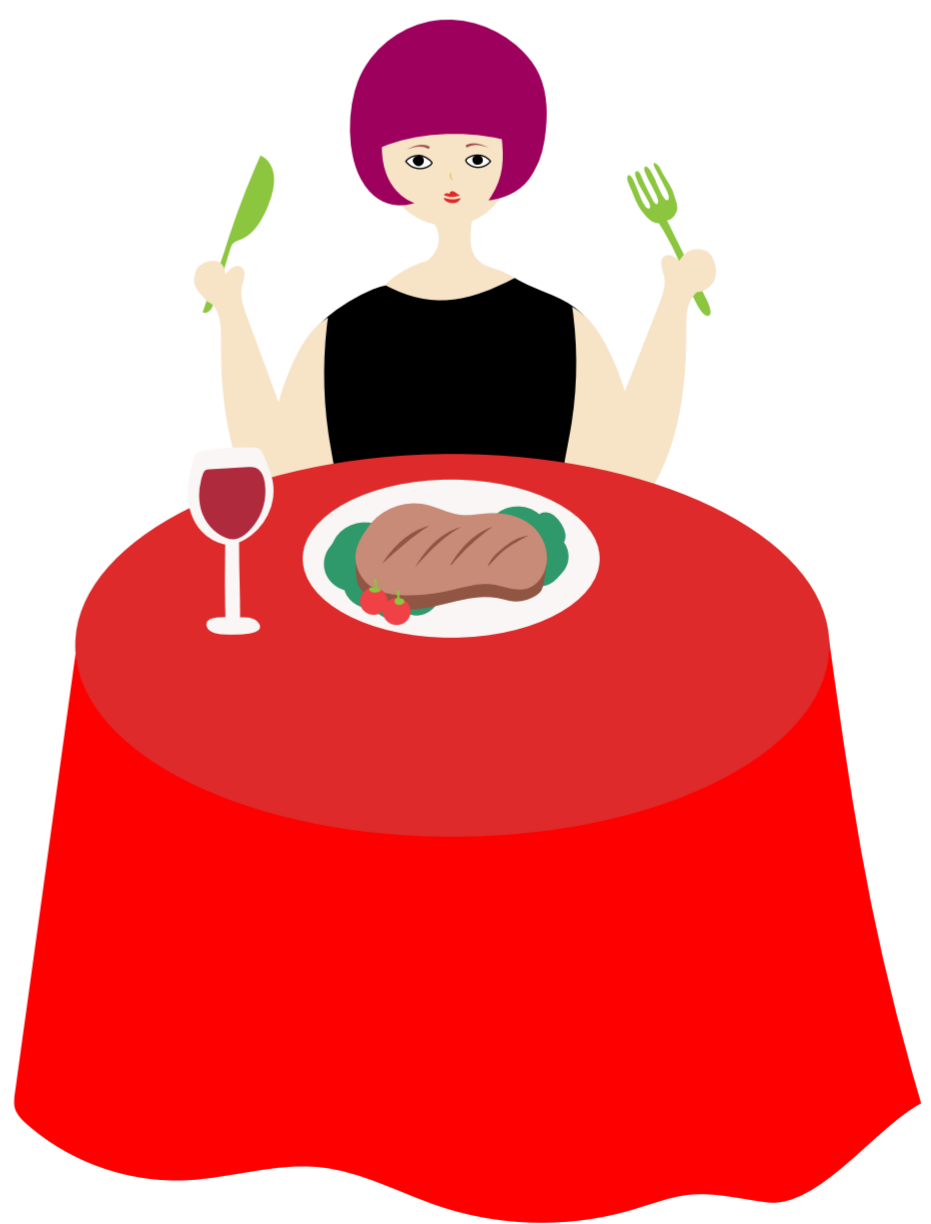
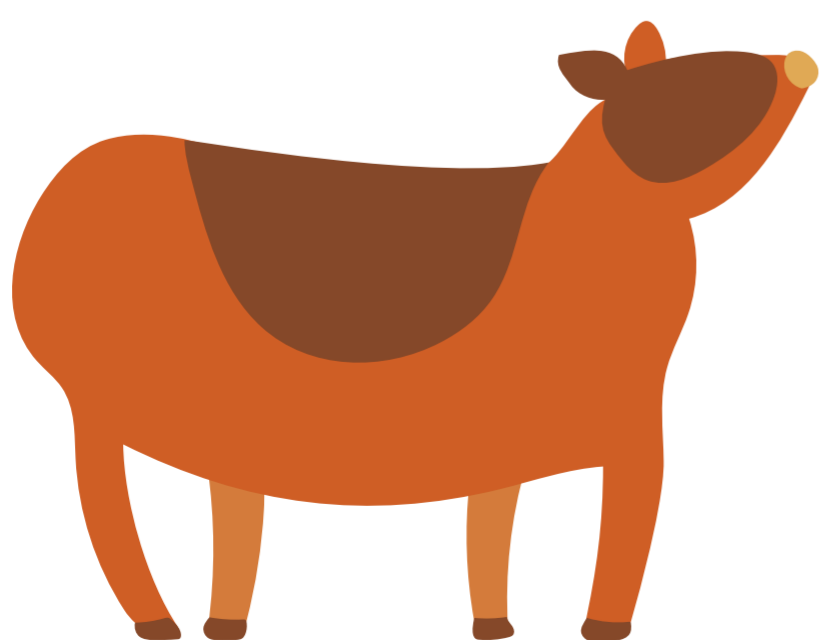
革製品は、動物から食肉としてお肉をいただくときに、余る皮を活用して作られています。

なので、動物の命を革製品を作るためだけにいただくことはありません。

食肉文化が続く限り、動物に感謝の想いをこめて、命の一部である皮を無駄なく革製品として活用していく。

これは、ずっと昔からつづくエシカルな活動であり、先人たちの知恵なのです。

お肉、革製品、化粧品や医療など、動物からいただいた命は
余すことなく活用されています



革製品をつくること、使うことは 脱炭素につながります。

革製品を使うのをやめたとしても、私たちがお肉を食べ続ける限り、皮は余る部分として畜産から出続けます。

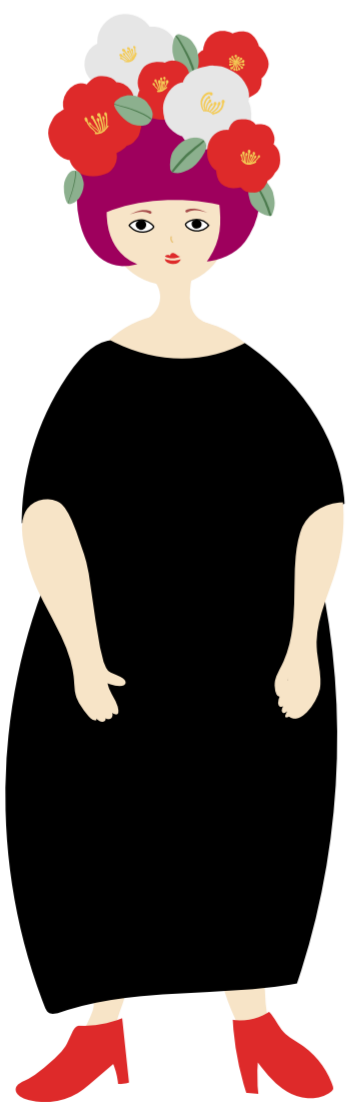
例えば牛の皮は、日本だけでも1年間に約100万頭分*。

ハンドバッグにして約800万個分、革靴にして約2500万

足分の皮を無駄に廃棄・焼却してしまうことになり、相当な二

酸化炭素が排出されます。

皮を、革製品として活用することは、脱炭素につながる地球にやさしい行いなのです。



+ 2500万足!



+ 760万個!



* 2021年のデータ

革製品は長持ち。
使うほど、愛着が湧きます。

流行のものや、安価なものが、必要な時もあるでしょう。

けれど、その中には長持ちしないものもあります。

短いスパンで買い替えると、モノをつくるときと捨てるときに、

地球環境への負担がかかります。

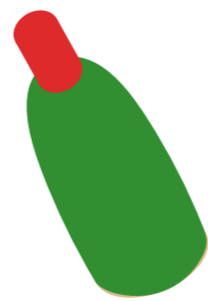
けれど、革製品は丈夫で長持ち。お手入れをし、長く持つほど、

風合いが出て愛着も湧きます。

革は長い目で見ると、地球にやさしいエシカルな素材なのです。



お手入れするほど、自分にとって特別なもの、大切なものになっていく!



汚れを落とし、保湿する!私たちのスキンケアみたい!

豊岡鞆の歴史

古くは古事記に記された柳細工であり、奈良の正倉院に上納したとされる

「柳筥（やなぎかご）」。

市内を流れる円山川の湿地帯に自生するコリヤナギを使って編まれた柳細

工のかごである「柳行李（やなぎこうり）」が豊岡鞆の原点です。

素材は革や布に変わり、西欧のバッグの影響を受けながらそのかたちも多

岐にわたっていきました。

鞆とは、革で包む、と書きます。「大切なものを、身につけて運ぶ。」

それが鞆の本質であると考え、豊岡鞆の思いは、現代においても変わるこ

とはありません。



豊岡の鞆づくり

素材の選定、加工や雑製、器具の取付け。鞆作りにはいくつもの工程があり、それぞれにおいて職人の高い技術と様々な道具とが組み合わせられることで、ようやく一つの鞆がつくられます。また、生産性の優先により失われつつある工程（手縫い・コバ磨き）も、大切に継承しています。

手縫い

非常に時間がかかる手縫い作業。同じ力、リズムで縫わないとステッチが乱れるため、綺麗に早く縫うには熟練が必要です。世界的鞆メーカーではこの手法で鞆を縫っています。

コバ磨き

革の断面を染料とワックスで何度も磨き上げる作業です。手作業では、指先に微妙な感覚がないと綺麗に磨けない、熟練度の高い作業と言えます。機械による顔料塗りに移行する工場が増え、コバ磨きを行える熟練工は減っています。

